

時代を読む

「民族」「人権」再考

加藤周一
樋口陽一

「民族」「人権」再考
時代を読む

加藤周一
樋口陽一

時代を読む―「民族」「人権」再考

2014年5月16日 第1刷発行

著者 かとうしゅういち 加藤 周一 ひぐちよういち 樋口陽一

発行者 岡本 厚

発行所 株式会社 岩波書店

〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

案内 03-5210-4000 販売部 03-5210-4111

現代文庫編集部 03-5210-4136

<http://www.iwanami.co.jp/>

印刷・精興社 製本・中永製本

©本村雄一郎，樋口陽一 2014

ISBN 978-4-00-603270-8 Printed in Japan

岩波現代文庫の発足に際して

新しい世紀が目前に迫っている。しかし二〇世紀は、戦争、貧困、差別と抑圧、民族間の憎悪等に対して本質的な解決策を見いだすことができなかったばかりか、文明の名による自然破壊は人類の存続を脅かすまでに拡大した。一方、第二次大戦後より半世紀余の間、ひたすら追い求めてきた物質的豊かさが必ずしも真の幸福に直結せず、むしろ社会のありかたを歪め、人間精神の荒廃をもたらすという逆説を、われわれは人類史上はじめて痛切に体験した。

それゆえ先人たちが第二次世界大戦後の諸問題とばかりに取り組み、思考し、解決を模索したかの軌跡を読みとくことは、今日の緊急の課題であるにとどまらず、将来にわたって必須の知的営為となるはずである。幸いわれわれの前には、この時代の様々な葛藤から生まれた、人文、社会、自然諸科学をはじめ、文学作品、ヒューマン・ドキュメントにいたる広範な分野のすぐれた成果の蓄積が存在する。

岩波現代文庫は、これらの学問的、文芸的な達成を、日本人の思索に切実な影響を与えた諸外国の著作とともに、厳選して収録し、次代に手渡していこうという目的をもって発刊される。いまや、次々に生起する大小の悲喜劇に対してわれわれは傍観者であることは許されない。一人ひとりが生活と思想を再構築すべき時である。

岩波現代文庫は、戦後日本人の知的自叙伝ともいふべき書物群であり、現状に甘んずることなく困難な事態に正対して、持続的に思考し、未来を拓こうとする同時代人の糧となるであろう。

S245

学問の冒険

河合雅雄

日本独自のサル学を切り拓いた著者が、探検と冒険の喜びに満ちた半生をふりかえり、学問の創造性を育む「雑木林の思想」の魅力を存分に語る。

S246

未来からの遺言

伊藤明彦

ある被爆者体験の伝記

吉野さん(仮名)が語った感動の被爆体験に重大な謎があった。それは幻の語りだったのか。被爆者の声を聞き取り続けた著者が問う衝撃の書。(解説)今野日出晴

S247

砂の文明 石の文明 泥の文明

松本健一

「砂の文明」のイスラム圏、「石の文明」の欧米、「泥の文明」のアジア。「文明の衝突」論を批判し、「泥の文明」の可能性を追求する。

S248

脳の学習力

子育てと教育へのアドバイス

S・J・プレイモア
U・フリス
乾敏郎
山下博志
吉田千里

脳科学の最新の研究が脳のメカニズムを解明する。早期教育の有効性、効率的に脳を発達させる方法、熟年世代の学習の可能性を考察する平明な一冊。

S249

営業をマネジメントする

石井淳蔵

個人がすべてを背負う属人営業から組織中心の合理的な営業へ。営業プロセスごとの専門性を高めて、顧客の多様なニーズに応える。

S250 中華万華鏡 辻 康 吾

庶民の日常生活から国際紛争への対処まで様々な事象の背景をなす中華世界の容易に変わらない深層を探り、中国理解のための鍵を提供する。岩波現代文庫オリジナル版。

S251 ことばを鍛えるイギリスの学校 山本麻子

—国語教育で何ができるか—

幼い頃から自分の力で考え、論理を築き、説得的に表現できるよう日々鍛えられる英国の子どもたち。密度の濃い国語教育の実態を具体的に紹介する最新改訂版。

S252 孤 独 死 額 田 勲

—被災地で考える人間の復興—

大震災をようやく生きのびた人びとが、仮設住宅で、誰にもみとられずに亡くなっていくのは何故か。日本社会の弱者切り捨ての実態に迫る渾身のレポート。(解説)上 昌広

S253 日本の空をみつめて 倉 嶋 厚

—気象予報と人生—

気象と文化をめぐるエッセイ。身近な「天気」と人生との関わりを俳句や故事成語を交えて語る思索の旅。気象予報の現場で長年活躍してきた著者の到達点。

S254 (こどもファンタジー) コレクションI 子どもの本を読む 河合隼雄 河合俊雄 編

「読まない」と損だよ」。心理療法家が、大人にも子どもにもできるだけ多くの人に読んでもらいたい児童文学の傑作を紹介する。(解説) 石井睦美

S255
《子どもファンタジー》
コレクシヨンⅡ ファンタジーを読む

河合隼雄
河合俊雄編

ファンタジー文学は空想への逃避ではなく、時に現実への挑戦ですらある。心理療法師が、ルッゲウィンら八人のすぐれた作品を読む。〈解説〉河合俊雄

S256
《子どもファンタジー》
コレクシヨンⅢ 物語とふしぎ

河合隼雄
河合俊雄編

人は深い体験を他の人に伝えるために物語をつくった。児童文学の名作を紹介しつつ、子どもと物語を結ぶ「ふしぎ」について考える。〈解説〉小澤征良

S257
《子どもファンタジー》
コレクシヨンⅣ 子どもと悪

河合隼雄
河合俊雄編

創造的な子どもを悪とすることがある。理屈ぬきに許されない悪もある。悪という永遠のテーマを、子どもの問題として深く問い直す。〈解説〉岩宮恵子

S258
《子どもファンタジー》
コレクシヨンⅤ 大人になること
のむずかしさ

河合隼雄
河合俊雄編

カウンセラーとしての豊かな体験をもとに、現代の青年が直面している諸問題を掘り下げ、大人がつきつけられている課題を探る。〈解説〉土井隆義

S259
《子どもファンタジー》
コレクシヨンⅥ 青春の夢と遊び

河合隼雄
河合俊雄編

文学作品を素材に、青春の現実、夢、遊び、性、挫折、死、青春との別離などを論じ、人間としての成長、生きる意味について考える。〈解説〉河合俊雄

S260

世阿弥の言葉

土屋恵一郎

―心の糧、創造の糧―

世阿弥の花伝書は人気を競う能の戦略書である。能役者が年齢とともに試練を乗り越えるためのその言葉は、現代人の心に響く。

S261

戦争とたたかう

水島朝穂

―憲法学者・久田栄正のルソン戦体験―

軍隊での人間性否定に抵抗し、凄惨な戦場でも戦争に抗い続けられたのはなぜか。稀有な従軍体験を経て、平和憲法に迫りつく感動の軌跡。いま戦場を再現・再考する。

S262

過労死は何を告発しているか

森岡孝二

―現代日本の企業と労働―

なぜ日本人は死ぬまで働くのか。株式会社論、労働時間論の視角から、働きすぎのメカニズムを検証し、過労死を減らす方策を展望する。

S263

ゾルゲ事件とは何か

チャルマーズ・
ジョンソン
篠崎務訳

尾崎秀実とリヒアルト・ゾルゲはいかに出会ったのか。なぜ死刑となったか。本書は二人の人間像を解明し、事件の全体像に迫った名著増補版の初訳。(解説)加藤哲郎

S264

あたらしい憲法のはなし他三篇

高見勝利編

―付 英文対訳 日本国憲法―

日本国憲法が公布、施行された年に作られた「あたらしい憲法のはなし」「新しい憲法 明るい生活」「新憲法の解説」の三篇を収録。

S265

日本の農山村をどう再生するか 保母武彦

過疎地域が蘇えるために有効なプログラムが求められている。本書は北海道下川町、島根県海士町など全国の先進的な最新事例を紹介し、具体的な知恵を伝授する。

S266

古武術に学ぶ身体操法 甲野善紀

桑田投手が復活した要因とは何か。「ためない、ひねらない、うねらない」、著者が提唱する身体操法は、誰もが驚く効果を発揮して各界の注目を集める。(解説)森田真生

S267

都立朝鮮人学校の日本人教師 梶井 陟
—一九五〇—一九五五—

朝鮮人の子どもたちにも日本人の子どもたちと同じように学ぶ権利がある！冷戦下、廃校への圧力に抗して闘った貴重な記録。(解説)田中 宏

S268

医学するところ 日野原重明
—オスラー博士の生涯—

近代アメリカ医学の開拓者であり、患者の心を大切にした医師、ウィリアム・オスラー。その医の精神と人生観を範とした若き医学徒だった筆者の手になる伝記が復活。

S269

喪の途上にて 野田正彰
—大事故遺族の悲哀の研究—

かけがえのない人の突然の死を、遺された人はどう受け容れるのか。日航ジャンボ機墜落事故などの遺族の喪の過程をたどり、悲しみの意味を問う。

S270

時

代を讀む
「民族」「人権」再考

樋加
口藤
陽周

「解釈改憲」の動きと日本の人権と民主主義
の状況について、二人の碩学が西欧、アジア
をふまえた複眼思考で語り合う白熱の対論。

本書は一九九七年五月、小学館より刊行された。文庫化にあたり写真と資料編を割愛した。なお、その後の時日の経過の中で読者の記憶を呼び起こす必要があると思われる事項について最小限度の説明を「」の中で示しておいた。

目次

ブ
ロ
ー
グ

『美女と野獣』とGI

解放感と敗北感——敗戦

戦後改革の意味するもの

日本の「伝統」と天皇制

「憲法」という文化

「近代知」は終わったのか

「解釈改憲」をめぐるって

第一章 自由と平等か／自由か平等か

戦前と戦後——西洋と日本

「同じだから平等」か「違うから平等」か

異論の自由	45
民主主義的傾向の「復活強化」?	52
「古典」の意味は	57
被害感情の欠落	61
知の虚栄がなくなった	66
「建て前社会」なのか?	71
キリスト教とマルクス主義のインパクト	75
第二章 対外関係の中での憲法	81
なぜ憲法を「押しつけられた」のか	83
「国体」の護持	87
「ヨーロッパ中心主義」か?	92
日米安保——その建て前と本音	96
全面講和論をふり返る	100
米中と日中の関係	105

「国際紛争」とは……………	108
核——政策の問題か、倫理の問題か……………	115
持っている国が核を減らすこと……………	119
第三章 ネイション・ステート(国民国家)……………	125
ネイション——デモスかエトノスか……………	127
政教分離の意味すること……………	132
ネイション・ステートの動揺……………	136
「脱亜論」再考……………	139
文化の発生地と内容の区別……………	143
戦争と民主主義……………	146
「主権」の問題……………	150
あらためて第九条を考える……………	157
理想に近づくための有利な現実的条件……………	162
軍の論理と民主主義——徴兵制をめぐる……………	168

ナシヨナリズムをめぐる「右」と「左」……………

172

第四章 日本人のアイデンティティ……………

175

「普通の国」をめぐる……………

177

「雑種文化としての憲法」の可能性……………

182

時代錯誤としての「近代の超克」……………

186

「共同体」の正と負……………

189

ヨーロッパの「悲観主義」をめぐる……………

194

多数の専制に抗して……………

198

「空気」の圧力……………

201

ほんとうの「近代の超克」にむけて……………

206

参考文献……………

211

あとがき……………

213

岩波現代文庫版のための追補……………

215

樋口陽一……………

樋口陽一……………

樋口陽一……………

樋口陽一……………

プロローグ

一九四五年八月一五日、日本の敗戦をどのように受けとめたか、敗北感か解放感か。この感情はその後制定された日本国憲法に対しても微妙に影響を与える。